

13. 帝国へのまなざし

日時：2011年1月22日(土) 13時45分～18時

場所：淡路夢舞台国際会議場304室

報告者：守川知子（北海道大学）、小泉順子（京都大学）、岡本隆司（京都府立大学）

コメンテーター：秋田茂（大阪大学）

この研究会の趣旨は、ヨーロッパ的帝国でも植民地でもなかった地域から、近世・近代の「帝国」とは何かを検討することである。具体的には、イラン、シャム、清朝中国というアジアの3つの地域を取り上げるが、19世紀には、これらの地域は「帝国」の介入を受けながらも、当時の「地域大国」とも呼びうる重要な地位を占めていた。本研究会では、アジアの「地域大国」とその上層部（国王・官僚）による「帝国」に対する当時のまなざし・見解を、それぞれの地域の一次史料を用いて比較検討する。

まず守川報告では、イラン国王ナーセロッディーン・シャーの3度の欧州訪問のうち、第1回にあたる1873年の旅行が紹介された。19世紀のイランは、大国のイニシアティブによって国境が画定され、それと同時に、外部の先進的な技術が入ってきた時期であった。イラン自身は大国としての自負を有していたものの、国境に対する認識はあまりなく、鉄道敷設権や鉱山採掘権といった国益に直結する権利も譲り渡す。最終的にはナーセロッディーン・シャーは革命家によって暗殺されてしまう。

彼は旅行中に記録を書きとめ、帰国後、旅行記として出版した。国王や高官からの命令を受けた官僚の手による「官命旅行記」も多数執筆されていることからわかるように、当時は旅行記ブームの時代であり、彼はそうした雰囲気の中で自著を出版させたといえるが、彼自身が旅行記ブームを煽ったという側面も見逃してはならない。

ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、オーストリアなどを歴訪したシャーの旅行記には、各国元首との面会の様子は描かれるものの、政治的な要素は殆どなく、土地の印象や人々に対する感想などが極めて率直な筆致で書かれている。また、博物館や動物園が大のお気に入りであり、帰国後、イランにも同種の施設を導入したほどである。

この報告に対し、ナーセロッディーン・シャーが欧州各国の首脳と会見した際、国家間交渉のようなことは行われていたのかとの質問が出た。彼の付き合い方は、あくまで社交の性格が強かったと思われるが、そのようにして形成された欧州でのネットワークがそれなりの意味を持っていたのではないかと、との回答であった。また旅行記が誰に向けて書かれたのかと言えば、国王は常に国内での出版を前提として旅行記を執筆しており、国民に対する「啓蒙」が意図されていた。旅行団の構成については、基本的には宮廷の人間が国王に同行する形を取っていたが、資金が不足した時点で人員の一部を帰国させたり、場合

によっては訪問国政府から資金を借りたりすることもあった。

小泉報告では、タイのチュラーロンコーン（ラーマ5世）および彼の欧州旅行に焦点が当てられた。彼は計7回の外国旅行を行っているが、ここでは1897年の初めての欧州旅行が取り上げられた。シャム危機（1893年）によりフランスがメコン東側の一部を占有し、ラーオ人住民や無条約国人をフランス保護民として登録し領事裁判権等を享受させたため、タイ政府はそれを阻止するべくフランス政府と交渉を行い、1904年によりやく一定の制限を課すに至った。こうした文脈の下で行われた1897年の外遊は、対仏交渉など明確な目的を有する訪問であり、フランスでは6回の交渉が行われている。

ラーマ5世が執筆し後に公刊される記録は、正妻の一人に宛てた一種のラブレターともいえる書簡集であり、基本的には私的な性格を有するものであった。それによれば、同国王は教養人としての自負があり、欧州のアジアに対する「無知」に批判的な態度を取っていた。ラーマ5世は敬虔な仏教徒であり、英語にも或る程度堪能であったと思われる。彼は王家に関心を持ち、欧州各国の皇族・王国との信頼関係を構築することに腐心していた。欧州を理想化して見ることには批判的であったが、77人の子供のうち男子については、その殆どをイギリスを中心に西欧やロシアに留学させていた。

以上の報告に対し、ラーマ5世の妻に宛てた書簡以外に記録は存在したかという質問が出されたほか、彼は欧州に対する知識を豊富に有しており、国民統合の成功の度合いなど各国の統治状況を客観的に把握していたのではないかといったコメントが出された。これに対し報告者からは、ラーマ5世の外国訪問に関しては公式記録が存在するが、基本的に事実関係が記されているだけであり、政府が個々の行事をどう評価したかについては記載がない、との回答があった。また、1907年の2回目の欧州訪問に関しては娘宛ての書簡が出版されているものの、政治交渉の具体的な中身は見えにくいという点が指摘された。

岡本報告では、清朝の駐英公使・副使による記録に着目し、特に、1870年代の同時期に赴任した2人の官人、郭嵩燾（かく・すうとう）と劉錫鴻（りゅう・せっこう）の出使日記が比較検討された。清朝官人の記録については既に分厚い先行研究が存在するものの、表面的な紹介にとどまっているものが多い。ここでは、2人のヨーロッパ観をただ観察するのではなく、その背景にあった彼らの対中国観に焦点が当てられた。

郭嵩燾は『使西紀程』や『郭嵩燾日記』において、中国知識人の多くは、西洋は表面だけ優れていて根本は劣っていると認識しているが、実際には根本も優れていると述べる。彼は退廃した中国のアンチテーゼとして西洋を捉え、議会主義などは中国のモデルになり得ると主張したが、著作は故国で批判を浴びた。彼は帰国後、隠居してしまう。

劉錫鴻は郭嵩燾の副官であったが、郭嵩燾と対立したためドイツに転任した。その後ドイツでも周りと対立したため、最終的には故国に召還された。劉錫鴻は『英軹私記』においてヨーロッパの優秀さを指摘しつつも、それを中国にそのまま導入するべきではないと

主張した。彼は、中国もかつては優れていたものであり、中国自身の道・仁義を尊重すべきと述べた。彼によれば、ヨーロッパのそもそもの源は中国にあった。なお、劉錫鴻の日記には、通訳官が書いた記録を使用した部分があるので、分析には注意を要する。

以上の報告に対し、郭嵩燾や劉錫鴻の官人としての位置づけや外交を司る省庁の整備状況について質問が出されたところ、1870年代における駐英公使の地位はあまり高くなかったが、20世紀初頭には職業外交官としての位置づけが明確化されていったとの回答であった。外務省的な組織についても、最初からそのような機構が整備されていたわけではなく、1870～80年代は李鴻章が外交を取り仕切っていた。また、これらの官人が体制批判を行うことがあったかとの質問に対し、当時は君子あつての国家という認識が一般的であり、体制を批判するという発想は基本的になかったものの、理想的な統治形態に関するアイデアは個別に持っていたのではないかと、との回答であった。駐英公使の派遣団に通訳官等としてイギリス人が混じっていたことについては、時代が下るにつれ、外国人を外交団の一員として同行させることが問題視されるようになったと思われる、との回答であった。

以上の3報告に対し、秋田より以下のコメントがなされた。

今回の研究会では、イラン・タイ・中国の3カ国の事例が紹介され、それぞれの帝国に対するまなざしが明らかにされたという点で興味深いものであったが、守川報告と岡本報告が1870年代、小泉報告が1890年代を対象としており、時期の違いに注意する必要がある。特に1890年代は露骨な帝国主義時代であり、列強のアフリカ分割や東アジア侵出が本格化した時期である。また、史料としては国王自身の記録と官吏の記録が用いられていたが、両者の質的な相違にも留意する必要がある。今回の3報告では、いずれもヨーロッパを訪問したケースが扱われており、日本の事例、例えば岩倉ミッションの分析との比較も興味深いと思われる。またヨーロッパ訪問の際、グローバルに展開する植民地帝国という認識がどの程度存在したのか、帝国本国に対するまなざしと帝国システムに対するまなざしがどの程度交差していたのか、という点も考えてみる必要がある。

また、フロアからは以下のようなコメントがなされた。

イラン国王の比較的のんびりした態度からは帝国主義時代における切迫感があまり感じられないが、逆に言えば、日本は他の国と比べて特殊なくらい敏感に反応したと言えるのかもしれない。また、王族による外交は、当時のヨーロッパ的な感覚からいえば普通であり、イランやタイの欧州訪問はそれほど違和感をもって受け止められなかったと思われるが、中国については皇族自らが国外に出るという発想がなく、その点は他国と異なっていたと言える。さらに、イラン国王はウィーンで博覧会を見物しているが、当時は博覧会が諸帝国の力関係を可視化する機能を持ち始めた時期であり、それを目撃することによって帝国システムに対する認識が生じた可能性も考えられる。

イラン国王の欧州紀行

守川 知子

はじめに

19世紀のイラン（ガージャール朝：1796-1925年）という国
＝ 「帝国」でもなく、「植民地」でもない

* 当時の「地域大国」が、「帝国」をどのように見ていたか？

国境線の画定

- 1796年 ガージャール朝イランの成立
- 1813年 ゴレスターン条約：グルジア、アゼルバイジャンをロシアへ割譲
- 1823年 第1次エルズルム条約：オスマン＝ガージャール間の和平条約
- 1828年 トルコマーンチャーイ条約：アラス川がロシアとの国境に
- 1838～42年 第1次アフガン戦争
- 1847年 第2次エルズルム条約：トルコからイラクにかけての国境基本ラインが画定
- 1856年 ヘラート包囲
- 1857年 パリ条約：アフガニスタンの主権を喪失

1. ナーセロッディーン・シャーとその時代

ガージャール朝の第4代国王（1831年生まれ）：在位1848～96年

☆ 北側（対ロシア）・西側（対オスマン）の国境はほぼ画定済み
東側（対イギリス）も治世初期に画定

☆ 洋風文化・文物の導入

1848年 アミーレ・キャビールの近代化政策開始（～52年）

1851年 ダール・アル＝フォヌーン（王立理工科学校）設立

1858年 省庁改革：外務省・内務省・財務省などを設置

1873年 ナーセロッディーン・シャーの第1回ヨーロッパ旅行

☆ 外国への利権譲渡

1863年 電線敷設権

1872年 鉄道敷設・鉱山採掘権をロイターへ

1888年 銀行設立権をロイターへ

1890年 タバコ利権をタルボットへ

1891年～ タバコ・ボイコット運動 (→ 1905年 立憲革命)

1896年 ナーセロッディーン・シャー暗殺

☆ 旅行好きの王

ナーセロッディーン・シャーの主要な旅行と自身の手になる紀行文

- ・ホラーサーン紀行 (1866年) (書記官が執筆)
- ・ギーラーン紀行 (1870年)
- ・タバート紀行 (1870年) *はじめての国外旅行：オスマン領イラクへ
- ・欧州紀行 (1873年)
- ・マーザンダラーン紀行 (1875年) (側近が執筆)
- ・欧州紀行 (1878年)
- ・ホラーサーン紀行 (1883年)
- ・欧州紀行 (1889年)
- ・エラーケ・アジャム (1892年)

当時の旅行 (旅行記) ブーム

ガージャール朝の高官らによる旅行記史料=約300点 (19世紀後半には全体の半数以上)

目的： 巡遊、調査、使節、巡礼……

行先： イラン国内各地、ヨーロッパ、イラク、エジプト、メッカ、中央アジア……

「旅行記文学の普及」

この賞賛されるべき行いを国王陛下自らが普及された。この新たな時代においては、イランの民の優れた者のうち、旅行者でありながら益ある旅について記さない者はごくわずかしかおらず、皆、この崇高な行為において、陛下の追隨を行い、模倣に励んでいる。[MA: 127]

	FA	Mh	N	Mz	MhA	A	不明	計(国内)
周遊	12	5	49	16	2	7	13	104(58)
官命	10	5	73	2	0	1	7	98(57)
巡礼	4	4	41	15	2	9	6	81(18)
計	26	14	163	33	4	17	26	283(133)

* 「官命旅行記」…国王や高官からの命令を受けた官僚による調査報告書 [守川2001]

諸外国では、イギリス、ロシア、フランス、インドなどが対象

★ 3度のヨーロッパ旅行 = 1873年、1878年、1889年

2. ナーセロディーン・シャーの第1回欧州旅行

<旅程>

1873年4月 テヘラン出発 ～ 9月帰国

ロシア、ドイツ、ベルギー、イギリス、フランス、スイス、イタリア、オーストリア、
イスタンブール歴訪

- 5月11日 アンザリー港出航 蒸気船・鉄道
- 5月17日 モスクワ着 クレムリン、民族博物館、消防隊、(後宮帰国)
- 5月21日 ペテルブルク着 アレクサンドル2世、閲兵、エルミタージュ
- 5月29日 ドイツへ
- 5月31日 ベルリン着 ヴィルヘルム1世、ビスマルク
ポツダム、ケルン、ウイースバーデン、フランクフルト、ハイデルベルク、カールスルーエ、バーデン＝バーデン
- 6月16日 ブリュッセル着 レオポルド2世
- 6月18日 ロンドン着 ヴィクトリア女王(ダイヤモンドの勳章)、グラッドストーン
ポーツマス、グリニッジ、リヴァプール、マンチェスター、ロンドン市内
- 7月6日 パリ着 マクマオン、(ナポレオン、ブルボン家の遺品)、ルーブル
- 7月19日 ジュネーブ着
- 7月23日 トリノ着(7月26日ミラノ) ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世
- 7月28日 ウィーン着 フランツ・ヨーゼフ1世、ウィーン万博
インスブルック～ボローニャ～ブリンディジ～エーゲ海
- 8月16日 イスタンブール着 アブデュルアズィーズ1世
- 8月28日 ティフリス(トビリシ) 着ロシアに亡命した伯父 Bahman Mirza と面会
ギャンジャ～バクー
- 9月4日 アンザリー港着
- 9月22日 テヘラン着

皇族／各国大使

軍の閲兵／議会／警察

鉄道／蒸気船／軍艦

工場(兵器・大砲・綿織物・ゴブラン織り)／銀行／造幣局／海軍学校／病院

宮殿／庭園／調度品

教会

博物館／美術館／動物園／植物園(温室)／水族館／図書館

バレエ／オペラ／舞踏会／コンサート／劇場／手品／サーカス

<ドイツ>

人々は無礼である。ここでの自由は、ロシアよりもきわめて多い。…私が今見ているプロシアの駅は、簡素な部屋で簡素な造りである。ロシアのものの方が千倍もましである。…要するに、ロシアの駅停はこことは一切似ていない、ということだ。[pp. 76-77]

この境域で様相はすべて変わってしまった。人々、土地、土地の様子、馬車、食べ物、人、すべてが一変した。プロシアの土地の豊かさはロシアに比べて優っている。あらゆるものが目に入る。村、家、人、馬、ガチョウ、ガチョウの雛、豚、子豚、鳥、雌鶏、家の囲い、牛、馬、雌馬、牧草地、農地、色とりどりの花。[p. 77]

ロシア皇帝の宮殿ほどの壮麗さや立派さが無い。宮殿も家臣も建物の装飾なども、ロシアのほうがここよりはるかに勝っている。[p. 84]

ドイツでは女性が非常によく働く。とりわけ農作業や庭仕事に非常に精を出す。大半の男たちも働いている。[p. 127]

ヨーロッパの町はどれもみな同じだ。印刷された紙のようだ。1つの町を見ると、他もすべて同じである。子供、年寄り、女、庭園、小路、週刊、店舗、様相 [のいずれをとっても]。[p. 113]

ヨーロッパでととてもとても優れていて驚くべき技術は、大理石のように、漆喰を石にしていることである。石とまったく区別がつかない。なんとすばらしい技術か。その名を「スタッコ (Stuque)」という。[p. 123]

<ベルギー>

しばらくして、小さな川に至った。小さな橋があった。ドイツとベルギーの境界は、この川であるかのようだ。しかるに、この世界の創造主は、諸部族や諸国をどれほど、またどのように互いにわけ隔てられたのか。まったくもって驚きである。この区域では、人、言葉、信仰、土壌、水、山、大地が一変し、ドイツとはまったく似ていないところがない。山々は高く、木々に溢れ、気候はより涼しく、言葉はすべてフランス語で、人々は貧しく、外面も内面も、軍の状況、軍の服装、人間、一度に変わってしまった。ベルギーの住民はすべてフランス語を話している。個別の言語もある。彼らの宗派は大半がカトリックで、この国の臣民はドイツよりも自由である。君主がいて、名はレオポルド2世という。首都はブリュッセルだ。[p. 126]

[リエージュにて] 馬車から降りた。軍が立っていた。楽隊が演奏していた。だが、ベルギー国は、ととてもとても貧相な兵士を持っている。いずれも子供のように小さく、貧相な体格で力なく、痩せてよわよわしい。騎兵、砲兵、歩兵を見たが、どれも一様だった。彼

らの服も悪い。イランの実に貧相な軍隊でさえも、彼らよりはましだ。[p.132]

ベルギー王国はとても自由で気ままである。国王は何ら権限がない。諸事の決定は議会にある。代議士たちがそこに集まり、判断する。議会は立派な建物で、[ブリュッセルの]町の中にある。ちょうど開いており、代議士たちが集まっていた。この地方の新聞記者はとても自由だ。思いついたことは何であれ書く。誰をも恐れていない。[p.134]

<イギリス>

偉大な民族だということは明らかである。世界の創造主は、とりわけ彼らに権力と能力と知性と感性と教養を与えたのだ。だからこそ、インドのような国を征服し、新大陸や世界の他の諸都市のどこにでも相当な土地を所有しているのである。[p. 143, 守川2009]

[ウインザーにて] 女王の宮廷執事である Lord Chamberland (sic) が、イギリスの権威ある勲章のひとつである「ガーター勲章 (Jartier)」を持ってきた。これは、国王以外の人物には渡さないものである。女王は立ち上がり、自らの手で我々に勲章をつけ、肩帯をかけ、長いガーターもくれた。… [ガーター勲章の由来] …もらった勲章はダイヤモンドがちりばめられていた。帯や勲章に記されている文章は、「邪な考えを起こす者に、呪いと恥あれ (Honi Soit Qui Mal y Pense)」である。要するに、多くの敬意でもって勲章を受け取った。女王は我々に口づけし、我々もまた彼女に口づけした。着席した。こちらもまた、ダイヤモンドがちりばめられた新たな [デザイン] の「太陽勲章」と肩帯を、ダイヤモンドの我が肖像の入った勲章とともに女王に渡した。彼女もまた、この上ない敬意でもって受け取り、自らにつけた。[pp.149-150]

リヴァプールは大きな町であり、イギリスの大きな港かつ商業地である。大半は新大陸と往来している。新大陸からは小麦や綿がたくさん入ってくる。イギリスの小麦は彼らの食糧として十分な量をまかなえていない。イギリスやドイツなどからの多くの移民が、この港から新大陸へ行く。わかっているところでは、年に20万人以上がこの港から新大陸へ行き、誰一人としてヨーロッパの地には二度と戻ってこない。…商売と技術の町だ。労働者がとても多い。ロンドンの住人に比べて、ここには貧しい人が多いように見える。彼らの顔から明らかだが、苦勞して日々生計を立てながら暮らしている。[pp.173-174]

<パリ>

今日 [7月6日] はフランス人の中に異様な光景を見た。まず、ドイツとの戦争後の服喪の状況が残っている。老いも若きも総じて悲嘆に暮れ沈んでいる。女性たちの服は喪服であり、ほとんど飾りがなく、実に質素である。というよりも、ひどいものだ。たまに人々の中から「Viu(sic) Makmahon, Vive Marshal, Vive Shah Pers (マクマオン万歳、マーシャル万歳、ペルシアの王万歳)」という声が聞こえる。夜の散歩のときに聞いた別のものは、「王

権とその基盤が強固であらんことを。永からんことを」と大声で叫んでいた。何であれ明らかかなことは、現在、フランスには多くの派閥があるということだ。大半は王制支持者だが、その中にも3つの派がある。1つはナポレオンの子孫を望んでおり、もう1つはルイ・フィリップ（オルレアン公）の子孫を、また別の一派はブルボン家のヘンリー（アンリ）を求めている。彼もまたルイ・フィリップの息子であり、同じ一族なのだが、別の系統になっている。共和制支持者も強い。だが彼らもまた、一枚岩ではない。ある者は、共和制のおおもとである「赤い（Rouge）」共和制を求め、ある者は中間の共和制を求める。そこには王制があつたり、王がいなかつたりだ。別の者たちはそれぞれ別の道を求めている。こういった異なるグループの中では、今や一貫した統治はきわめて困難な作業である。このような事態の結末は、再び多くの血が流れ、国が荒廃する以外には何もなかり。完全な王制であれ、完全な共和制であれ、みな1つの考えにまとまる以外には。その時には、フランス国は最も強い国家となり、誰もが一目置かねばならないだろう。だが、これほどの意見の相違は、どうにかなる可能性はない。日に日に悪化している。これほどの偉大な国が損なわれてしまうのは実に残念だ。[pp. 210-211]

ヴェルサイユ宮殿にて、各国の大使と面会：日本—副島？（Naonobou Saneshima）[p. 215]

<オーストリア>

ウィーン万博見学

自国の文物や商品をもってきた各国に対して、それぞれに区画や場所が与えられている。たとえばフランスは、一列の陳列棚と、その両脇に二列の棚を整え、自国の商品を…まさに本場にあるがままに並べている。…一方、ロシア、イギリス、ドイツといった一部の大きな国々やオーストリア国は、たくさんの場所とたくさんの品物を展示している。オスマン国やエジプトやギリシアや日本や中国などは、それぞれに十分な程度で、あらゆる種類の品を送ってきている。[p. 299]

<イタリア>

バレッタからブリンディジ近郊まで、道の両側はすべてオリーブの木が生えている。オリーブ [の木] はとても古く、500年くらいはありそうだ。ヨーロッパのオリーブ油の大半はここからもたらされる。綿花栽培もあった。ブリンディジは古い町だ。鉄道が造られてから、少しずつ発展している。現在は港で、イギリスからの郵便や手紙がここを通過してインドへと運ばれる。同様に、インドからイギリスへは、エジプトと紅海を経由する。この地の人々はとても貧しい。…かつてテヘランで大使だったアシュラフ・パシャが船で迎えに来ている。…イスタンブール（Islambul）に向けて出航する。至高なるアッラーの思し召しがあらんことを。ヨーロッパ [旅行] ——神に感謝を——は、良好なうちに、至高なる

アッラーの恩寵により無事終わった。願わくば残りの旅行も順調に過ぎんことを。[p. 345]

<オスマン朝>

大宰相と、「イスラームの両国家の協調 (ittihad)」を話題に [p. 331]

スルタンは、太って大柄な男である。腹が出ていて、メランコリー気質で気遣いだ。暑い気候にまったく耐えられない。…オスマンのトルコ語である自分の言葉以外には、他の言語を何ひとつ知らない。いつも顔をしかめており、地理や幾何学と言った学問を何ひとつ享受しない。地理や地形や（緯度）経度はまったく理解しておらず、自分のものであるエルズルムがどの地点にあるのか、どこに位置しているのか、東なのか西なのか知りもしない。自身の2フェルサング[四方のことでさえも]10分の1も知らない。…非常に臆病で、一度も狩りに行ったこともなければ、銃を手にしたこともない。こういったよき性格にもかかわらず、現在、国事を宰相たちの手から取り上げ、自ら、それに女たちが介入している。1時間ごとに人々を罷免・任命する。誰も自分の未来が描けない。このような状況である。[pp. 349-350]

<中国>

Trentham の Duke of Sutherland の邸宅にて：

イギリスとフランスの戦争の前に、中国で中国人の手に捕らえられていたイギリス人——名前を Coke (sic) という——がいた。私は彼の捕虜生活について尋ねた。彼は説明した。捕虜の間、中国人はたいそう我々を苦しめた、と言った。[p. 176]

おわりに

★ ナーセロッディーン・シャー時代に導入されたもの

近代諸学・軍服・勲章・電線・鉄道・電灯・写真・舗装道路・博物館・動植物園……etc.

Nāṣir al-Dīn Shāh, *Rūznāma-yi khāṭirāt-i Nāṣir al-Dīn Shāh dar safar-i avval-i Farangistān*. Ed. F. Qāzīhā. Tehran, 1998.

Ītimād al-Saltāna, Muḥammad Ḥasan Khān. *Al-Ma'āthir al-āthār*. Lithography. [n.p.] [n.d.]

Amanat, A. *Pivot of the Universe: Nasir al-Din Shah Qajar and the Iranian Monarchy, 1831-1896*. University of California Press, 1997.

守川知子 (2001) 「ガージャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』55、44-68頁。

守川知子 (2009) 「イラン国王の欧州旅行 (1873年)」『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗 I 南アジア・中東・アフリカ』(歴史学研究会編、岩波書店)、217-218頁。



シヤム国王の欧州紀行

小泉 順子

1. はじめに

チュラーロンコーン/ラーマ五世王 [1853年-1910年、在位1868-1910年]

四世王モンクットの第9子

「チャクリー改革」

統治制度改革 ⇒ (領土喪失) 独立維持として評価

在位中の主たる“外国”旅行

- ①1871年3月9日～4月15日：シンガポール、ジャワ
- ②1871年12月16日～1872年3月16日：シンガポール、インド等
- ③1896年5月9日～8月12日：シンガポール、ジャワ
- ④1897年4月7日～12月16日：ヨーロッパ
- ⑤1901年5月5日～7月24日：シンガポール、ジャワ
- ⑥1907年3月27日～11月17日：ヨーロッパ

2. 1897年欧州歴訪

政治的背景：1893年「シヤム危機」後 フランス保護民問題 ⇒ ロシアに仲介依頼

国内留守番体制：サオワパーボンシー皇后を Regent に任命

王弟他 5名からなる諮問委員会

随行者：王弟3名、役人13名(5名は特定の官職なし)、留学する王族等の子供19名

目的： 5月12日 船上で上陸後の心得：

仏教の教えを守り怠惰を避け、勤勉・努力を奨励

海洋の学、教育・統治、国境防衛面での繁栄を学ぶ

同じ人間であることを強調

旅程：ベニスにはじまり、イタリア、スイス、オーストリア・ハンガリー、ポーランド、

ロシア、スウェーデン、デンマーク、イギリス、ベルギー、ドイツ、オランダ、

フランス、ポルトガル、スペインの各地 (一部公式・一部は非公式)

各国君主・首脳等と会見

3. サオワパーポーンシー宛書簡にみる「帝国」

背景 1897年欧州訪問の記録

- ・日誌 Phraya Sisathap (Seng), 1997 (1907). *Chotmai het sadet praphat Yurop Ro So 116*. Bangkok: Krom Sinlapakon.
- ・公文書記録
- ・サオワパーポーンシー宛書簡集 全旅程62通

サオワパーポーンシー

正妻4名 すべて国王自身の異母妹（1～3は姉妹同士）

1. スナンタークマーン 1860-1880年
2. サワーンワッタナー 1862-1955年
3. サオワパーポーンシー 1863-1919年
4. スクマーンマーラシー 1861-1927年

親王

ワチラーウット(六世王) & プラチャーティポック(七世王) 英 陸軍士官学校留学
ピサヌローク親王 イギリス留学、1898年からロシア留学
ナコーンラーチャシーマー親王 1898年からイギリス留学
ペッチャブーン親王 1905年からイギリス留学

関心の対象

◎王家との交流

- ・7月11日@ペテルゴフ

今朝の歓送の朝食には、王族がみな集まり大変親密な雰囲気だった。皇太后は泣き出さんばかりであった。そして今日から私は喜んで彼女の息子となり、彼女は私の母となった。いつも彼女が私にキスをしたが、今日は私の母となった彼女がほほを差し出し、私が彼女にキスをした。彼女の子供は、息子も娘もみな兄弟姉妹となった。

- ・7月27日@Keil河口、マハーチャクラー号船上（デンマーク訪問をふりかえって）
…私は、彼らの孫まで、三代にわたり知りあい、友人となることができて大変うれしく思う。もし私がイギリスやギリシャを訪れれば、家族全体と知り合うことにな

る。…今後は、よいことも悪いこともみな知らせあい、そうすれば出来る限り助け合うことができる。先日はニッキー[ニコライ二世]と協力することができた。ニッキーは、タイの問題で心を痛め、喜んで助けてくれた。今回はニッキーとすでに友人であったために容易に助けを得ることができたのだ。

◎王族の個性

・ 7月14日@ストックホルム

ここの国王は、愛情や好意を（ロシア）皇帝よりもさらにあけっぴろげに表現する。到着した初日から6～7回接吻攻めである。まずは迎えにきた船上で1回、そして今度は船が港に到着して1回、…それから宿舎の部屋につくとまた1回。…どこか展示会をみにいったり、一緒に歩いてどこか行くときは、レディのように手をとらねばならないようだ。おかげでジャワにいったときのようにとても疲れる。…陶器をみにつれていってもらったときのことだ。私が見ているときに、無理やり[私を]引っ張って突き進もうとして身体を翻したものだから、服の端が陶器に当たり割れてしまった。こういう話をきくと、彼は頭がいかれていると思うがそうではない。こういう人間なのだ。

・ (9月5日付@エッセン?)

…ロシア皇帝は、口数の少ない人間であり、自ら熟考した案について口にだして指摘することはないが、いつも黙って静かに実行にうつしていく人物であったことがわかった。…私はロシア皇帝とその深い知性に対して高い尊敬の念を抱いている。

しかしドイツ皇帝とはといえば、彼の言動や性格、われわれの国の統治に対する態度を観察したところ、あまり確かではなさそうだ。

・ 6月7日@ローマ 女性に注目

…ローマでは、私の理解するところ、王妃がすべてをとりしきっている。彼女はとても賢い。会話していて、話題がどこにいこうとも、すべて理解する。…他方男はといえば、国王はなんとも言いがたい。容貌は眉間にしわをよせ、ほほはだらりとたれている。…何か命じてもはっきりせず、策を練ったようには思えない。…実際、この宮殿の真の主は王妃である。国王が謁見にでるか私室に退くかも彼女の判断次第だ。

◎王族と臣民との関係

・ 6月29日@ブダペスト

(随行した王族・役人の行動を批判して…)

…われわれには本当に使えるよい人材がない。かといって、ヨーロッパの王族はとくに卓越したところがあるわけではなく、実際われわれにはかなわない。それなのに、われわれの王族が西洋の王族のようになりたいと考えれば、次の世代は衰退するだろうと懸念する。だが、私は子供たちみなにこの真実を分かるまで教えるつもりだ。

・ 6月29日@ブダペスト

…実際エンペラーと王族とは互いに嫌っているようだ。なぜならば彼ら王族はあまりに王族であり、それぞれ勝手をして畏れることがない。われわれが昔、誰の娘でも連れてくることができたときのことのようなのである。酒をのみ、女遊びにふけり、殺生もする。軍事に優れたものは一人もなく、民事でも何もできない。私も王族だが、あのようなさまは決して模範にすべきではない。

・ 7月22日@バルト海 マハーチャクリー号 コペンハーゲンへ

各国における王族と臣民との関係は、それぞれ異なっている。イタリアでは人々は王族を慕い尊敬している。自由に外出し、国王がどこへいこうとも、人々は帽子を挙げてhurrayと叫ぶ。だが通りを歩けば、押しのけてくることもあれば、車に近寄ることもある。そして車に書簡を投げ入れたり、手で直接国王に渡すことも可能である。人々は貧しく、町はそれほど清潔ではない。教養のある王族も多数いて、とくに王妃は美しく教養があり、人々の敬愛を集めている。しかし国王といえ、あまり賢くない。だが親切で慈愛に篤い。

(中略)

オーストリアではエンペラーがもっとも力をふるっている。かれは慣習を厳格に守り、揺るがない。…鋭い人物とはいえず、おしゃべりではないが、話せば裏がない。実際は、学術や政治にはつうじていて知識がある。…國中みな彼を神のように畏怖し、尊敬している。…もしもエンペラーが亡くなれば、ハンガリーでは独立しようとする反乱が起きるのではないかとひどく懸念される。なぜならば、王族の中にエンペラーほどの[有能な]人物がないからだ。みなそれぞればらばらで、結婚式か葬式以外では100日も1000年も顔をあわせることがない。兄弟姉妹は別々で団結しようとしな。ここでは王族と平民とは雲泥の差で、イタリアとは大きく異なる。(中略)

ロシアについてはすでにずいぶん述べてきた。エンペラーは派手(?)なことも慎み儀礼も好まない。細かなことは気にせず、威風堂々として威厳がある。王族は、

高位のものも低位のものも、皇帝に畏敬の念をいだき、みな愛し合い団結し、冗談をいいあって笑いあっているようだ。…皇太后といえば、すべての人々の母親といってもよい。その風格、威厳、そして人柄、教養、いずれも私は敬愛してやまない。…平民や役人は、みな皇帝を恐れている。われわれの臣民が王族を恐れる以上だ。
(中略)

スウェーデンでは、人々はイタリアよりもさらに自由である。すでに共和制になっているかのようだ。国王は誰に対してもよかれとふるまいおもねるために、何をいってもあまり重みをもってうけとめられない。でかけても、だれも帽子をとって挨拶しないし、何か命じるときにはあわててバタバタとしている。…実際にはとても親切な人だが、安定さに向け、ものごとを正確に覚えていない。役人も、統治もみな同様だ。…ノルウェーではなにか大きな事件がおきるにちがいない。国王の話では、人々は、リパブリックになりたいと切望しているという。

◎リパブリックと王朝

・ 9月11日@パリ

出発以来、今回ほど苦しんだことはない。貴女が私のパリ訪問を心配したとしても、私自身の心配の方が10倍も大きかったことを理解してほしい。なぜなら私自身、訪問する本人だったからだ。しかしパリに到着した時から大変な歓迎を受けた。大統領が私に同行し、車に乗り私の宿舎まで送り届けた。これはロシア皇帝以外、だれにたいしても示したことの無い歓迎ぶりだ。しかし健全なる判断力がある人なら、大統領がこのようにしたのは我々の権力を恐れた故ではなく、彼自身がロシアで歓迎を経験し、エンペラーの威徳を恐れ、そのまねをただけだろう。

◎シャム国王としての自信

・ 5月18日@ジュネーヴ

…美しい博物館となっている大きな建物があったが、おいてあるものは建物ほど価値があるとは思われなかった。しかしそこにいた係官よりましだった。日本からきているのか、中国のものか、まったく知らなかった。とくにそうしたものが多くおいてあり、中国のものと日本のものがゴタマゼだった。私たちに説明しようとしたが、こちらがもっときちんと説明すると信じようとしなかった。われわれのことを、ここにくる他の西洋人と同様に浅薄だと思ったようで、私は笑わざるをえなかった。…ただ印刷刊行されたすべての言葉のバイブルが集めてあったので、タイ文字版のバイブルがあるので送るといったら、聞こえなかったのか、あるいは理解できないようだった。

・ 7月18日@Solleftea, Northern Sweden

…翌日皇太子[後のグスタフ五世]とノルウェーの統治について尋ねた。彼は胸襟を開き、すでに広く知られていることとして、彼らはリパブリックになりたがっており、唯一スウェーデンと共通である外交も分離したいと希望していることを明らかにした。…私は軍事力と財政について尋ねた。そしてなぜオーストリア=ハンガリーのようにしないのかと尋ねた。すると昔からこうなっており変更は難しいという。それで私は、昔からある古いものを変えるのが難しければ、そのまま変わらないと述べた。これらの発言を皇太子が国王に告げると、国王は、大声を上げて、すっかりなかまでお見通しだと叫び、なぜタイ人がヨーロッパの中のことをこれほどよく知っているのだと奇妙に思ったという。

◎ヨーロッパの知識

・ 7月22日@バルト海 マハーチャクリー号でコペンハーゲンへ

…ロンドンを訪問したチャイヤンと話しこんだ。いくつかの側面においては、彼の知識の方が豊富でよく知っているからだ。私の進み方は間接的であり、見聞きすることはみな王族や主人という狭い隙間から垣間見えることに過ぎない。あるいはさもなければ、見えることはつかの間光るものであって、博学といっても限られたことを知るに過ぎず、大方は無知である。

今回ヨーロッパで得るべきことは次の4つが挙げられよう。

1. ヨーロッパの生活がいかなるかをみること
2. 富が生まれるところと、富がいかなるものかをみること
3. 力、つまり敵を破壊し戦うことについてみること
4. 娯楽

これ以外、統治や政治、国家のことについては、本で読んだこと以外は、つかのまの訪問者が一朝一夕にわかることではない。

・ 5月14日@ベニス

…ベニスにきたら、汚物をすてる排水パイプについて尋ねようと決意していたのだが、我が国と同様、他でもなく運河に捨てるといふ答えしか得られなかったことは大いに残念である。トイレがあちらこちらにあるのをみた。水上に突き出すように作ってあるものもあった。ただ寒いために、板で囲ってすっかりみえないところが異なる。…もう1つ異なる点は、ここが海水なので、飲み水にも水浴びにも使うこともないし、臭いを消去するのも簡単であるということだ。そうであっても水は非常に汚い。

4. おわりに

- ・ シヤムにおける近代化とヨーロッパの帝国

B. アンダーソン 比すべきは“modernizing regime of colonial Southeast Asia”

「…はるかなるシヤムの地では、ラーマ五世(チュラロンコン)が、その子供や甥たち をサンクト・ペテルブルグ、ロンドン、ベルリンの宮廷に送り、世界モデルの機微を学ばせた。彼は、一八八七年には、世界モデルの要請にしたがって法定長子相続継承の原則を制度化し、かくして「シヤムを『文明化』した西欧の君主制と同列」に置いた。…」[アンダーソン 1997: 46]

「さて、シヤムでは、明治天皇の同時代人、長きにわたってシヤムに君臨したチュラロンコン(在位一八六八—一九一〇)が、日本で彼と対等の地位にあった人々とはまるで違うやり方で西洋膨張主義から彼の王国を防衛した。英領ビルマ・英領マラヤと仏領インドシナにはさまれ、彼は、まともな武力装置を建設するかわりに、抜け目のない巧みな外交に全力を傾注した。(国防省は一八九四年になるまで設立されなかった。)彼の軍隊は、ある意味では、一八世紀ヨーロッパのごとく、主としてヴェトナム人、クメール人、ラオ人、マレー人、中国人の傭兵、夫役者をごたませに整列させたものだった。あるいはまた、教育制度の近代化によって公定ナショナリズムを推進しようという努力も、たいして行われなかった。実際、初等義務教育の導入は、彼の死後10年以上たってからのことであり、シヤム最初の大学は、一九一七年、つまり東京帝国大学創立の四十余年後のことであった。にもかかわらず、チュラロンコンは近代化の推進者を自認していた。ただ、彼のモデルは、連合王国やドイツではなく、オランダ領東インド、英領マラヤ、インド帝国などの植民地官僚国家であった。…」[アンダーソン 1997: 163-4]。

なぜか ⇒ チュラーロンコンがみたヨーロッパの王朝？

アジアの文脈？

参考文献

Anderson, Benedict R. O'G. 1978. “Studies of the Thai State: The State of Thai Studies.” In *The Study of Thailand, Analyses of Knowledge, Approaches and Prospects in Anthropology, Art History, Economics, History, and Political Science*, edited by Eliezer B. Ayal. Southeast Asia Series, no. 54, Athens: Ohio University Center for International Studies.

----- 1997. 『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石さや・白石隆訳) NTT出版 [*Imagined Communities: Reflections on the Origins and Spread of Nationalism*. Rev.ed. London: Verso, 1991].

- Bressan, L. 1998. *King Chulalongkorn and Pope Leo XIII : Siam and the Vatican in the 19th Century*. Bangkok: Catholic Mission of Bangkok.
- Chalong Soontravanich (Chalong Sunthrawanit).1973. “Khwamsamphan rawang prathet russia lae prathet thai tangtae plai khristsattawat thi 19 thung ton khristsattawat thi 20. M.A.thesis, Chulalongkorn University.
- Chulalongkorn, King of Siam. 1962. *Phraratchahathalekha mua sadet phraratchadamnoen praphat yurop pho so 2440*. 2 vols. Bangkok: Khurusapha.*
- , 1996. *Klai ban*. 2 vols. Bangkok: Cremation volume for Thongphap Phanitphat.
- 飯島明子. 1976. 「タイにおける領事裁判権をめぐって—保護民問題の所在」『東南アジア研究』14巻1号.
- Kong chotmai het haeng chat, Krom sinlapakon, Thailand. 1980. *Kansadet praphat yurop khong phrabat somdet phra chunlachomklao chaoyuhua ro. so. 116*. Bangkok: Krom Sinlapakon.
- La-ortong Amarinratana(Laothong Amarinrat). 1979. “Kansong nakrian pai suksa ta tang prathet tangtae pho so 2411-2475 [The sending of students abroad from 1868-1932].” M.A. thesis, Chulalongkorn University.
- Lim, Patricia Pui-Huen. 2009. *Through the Eyes of the King: The Travels of King Chulalongkorn to Malaya*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Narenthararacha, Mom. 2004. *Chotmai het sadet phraratchadamnoen praphat thawip yurop khrang thi song* (phrabat somdet phra chunlachomklao chaoyuhua) ro. so. 125-126. Bangkok: Chulalongkorn University.
- Peleggi, Maurizio. 2002. *Lords of Things: The Fashioning of the Siamese Monarchy's Modern Image*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Pornsarn Watanangura (Phonsan Watthanangkun) et al. ed. 2003. *Kansadet praphat yurop khrang thi I khong phrabat somdet phrachunlachomklao chaoyuhua pho.so. 2440*. [The first visit of King Chulalongkorn to Europe in 1897] Bangkok: Centre for European Studies at Chulalongkorn University.
- Ratchasakunlawong*. Bangkok: Krom Sinlapakon.
- Sachchidanand Sahai. 2003. *Ro.5 Sadet india* (India in 1872: As Seen by the Siamese).Translated by Kanthika Si'udom. Bangkok: The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities Textbooks Project.
- Sisathap (Seng), Phraya, 1997 (1907). *Chotmai het sadet praphat yurop ro. so. 116*. Bangkok: Krom Sinlapakon.
- 玉田芳史. 1996. 「チャクリー改革と王権強化:官僚の変遷を手がかりとして」玉田芳史編『チャクリー改革とタイの近代国家形成』(重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No.11.
- Wuthichai Munsin. 2000. *Phrabat somdet phra chunlachomklao chaoyuhua sadet praphat yurop ro.so. 116* (pho. so. 2440). Bangkok: Ton O.

Wyatt, David K. 1969. *The Politics of Reform in Thailand: Education in the Reign of King Chulalongkorn*. New Haven: Yale University Press.

清朝官人のイギリス紀行 — 1870年代を中心に

岡本 隆司

Scarcely any two travellers, however, see the same objects in the same light, or remember them with the same accuracy. What is involved in the darkness to the optics of one man is often arrayed in the brightest colours to those of another. An impression vanishes or endures according to the material that receives it. (*An Embassy to China: Being the Journal Kept by Lord Macartney during His Embassy to the Emperor Ch'ien-lung, 1793-1794*, edited with an Introduction and Notes by J. L. Cranmer-Byng, London, 1962, p. 199.)

「二人の旅人が同じものを同じように見るということも、同じように正確に記憶しているということも、ほとんどない。ある人の目に暗く映ずるものが、他の人の眼にはまるで明るく色もとりどりに見えるということが往々にしてある。ある印象というものは、それを受け取るもの次第で、消え失せもすれば長つづきもする。」(マカートニー著/坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社東洋文庫、1975年、246頁)

〇はじめに

- ・「出使日記」研究
 - ：思想史研究～清末の在外使節制度と外交史研究
 - ：文献学的研究と視角の転換

- ・制度のありよう
 - ～地域の異同
 - ＝ヨーロッパ・アメリカ・日本

- ・駐英公使（出使英國欽差大臣）と出使日記
 - 郭嵩燾1876-1879『使西紀程』（劉錫鴻1876-1877『英軺私記』）
 - 曾紀澤1878-1886『曾侯日記』『使西日記』
 - 劉瑞芬1885-1890『西軺紀略』
 - 薛福成1889-1894『出使英法義比四國日記』
 - 龔照瑗1893-1897
 - 羅豐祿1896-1901
 - 張德彝1901-1905

- ・課題の設定

: なぜ1870年代のイギリスか＝史料の系統性とイギリス帝国

～同行の知識人＝郭嵩燾・劉錫鴻

＝同一「帝国」に対する異なるみかた～「帝国」としての清朝中国のありよう

: 流動的だったこの時期の世界観・国家構想～外国・参照軸としてのイギリス帝国

- ・登場人物

正使：郭嵩燾（筠仙）湖南湘陰（1818-1891）

道光27年（1847）の進士。1853年、太平天国に対抗する湘軍を結成した曾國藩に協力し、軍費調達などに従事した。1874年、日本の台湾出兵にさいし、朝廷の召集をうけて海防の意見書を提出、その後、福建按察使、総理衙門大臣を歴任する。翌年おこった雲南でのイギリス公使館員殺害事件、いわゆるマーガリー事件の謝罪のため、出使英国欽差大臣に任命された。謝罪の任をおえると、そのままロンドン常駐の公使となり、駐仏公使をも兼ねた。1879年はじめ任を終え帰国したが、かねて非難を受けていたため、上京せず、まっすぐ郷里に帰り、そこで余生を送ることになる。

副使：劉錫鴻（雲生）廣東番禺（生没年未詳）

道光28年（1848）の挙人、1866年、刑部員外郎に任ぜられる。1876年に三品銜候補五品京堂、光祿寺少卿となって、出使英国副使に任命されて渡欧した。翌年、駐独公使に異動、1878年に解任され、帰国後、1880年に通政使司参議となる。1881年3月、李鴻章を弾劾して西太后の怒りに触れ、罷免された。以後の事蹟は未詳である。

三等参贊：黎庶昌（莼齋）貴州遵義

三等繙譯：徳明（在初）漢軍鑲黄旗（のち張徳彝と改名）

鳳儀（夔九）蒙古正黄旗

マカートニー（Samuel Halliday Macartney, 馬格里（清臣））

隨員兼繙譯：張斯恂（聽帆）浙江慈谿

隨員：劉孚翊（和伯、鶴伯）江西南豐

姚嶽望（彦嘉）江蘇陽湖（辦理支應官）

李荊門（湘浦）江蘇甘泉

黄宗憲（玉屏）湖南新化（監印官）

隨行：ヒリヤー（Walter Henry Hillier, 禧在明）イギリス公使館二等通訳官

- ・旅程

光緒二年十月十七日～十二月初八日（1876年12月2日～1877年1月21日）

十月十七日（12月2日）上海出發

十月二十一日（12月6日）香港到着
十月二十三日（12月8日）香港出発
十月二十八日（12月13日）シンガポール到着
十月二十九日（12月14日）シンガポール出発
十一月初六日（12月21日）コロombo到着
十一月初七日（12月22日）コロombo出発
十一月十五日（12月30日）アデン到着
十一月十六日（12月31日）アデン出発
十一月二十一日（1877年1月5日）スエズ湾到着
十一月二十四日（1月8日）ポートサイド到着、地中海に入る
十一月二十八日（1月12日）マルタ島到着
十二月初三日（1月16日）ジブラルタル到着
十二月初四日夜（1月17日）リスボン沿岸を通過
十二月初五日夜（1月18日）フィニステレ岬を通過
十二月初七日（1月20日）英仏海峡に入る
十二月初八日（1月21日）サザンブトン到着

I 郭嵩燾『使西紀程』

○内容

- ：赴任の旅程を記した日記体の著作（光緒年間刊行）
～『郭嵩燾日記』湖南人民出版社、全4巻、1981-83年。『使西紀程』原稿を含む
- ①旅程記録～任地に着くまでの風物の紹介＝ガイドブック的な役割
 - ②意見書～当時の郭嵩燾の政見・世界観をあらわす

○みどころ

光緒二年十月二十日（1876年12月5日）

彬彬然見禮讓之行焉。足知彼土富彊之基之非苟然也〔中國之不能及、遠矣〕。

彬彬然と禮讓の行はるるを見たり焉。彼土の富強の基の苟然に非ざるを知るに足るなり〔中國の及ぶ能わざること、遠し矣〕。

二十一日（1876年12月6日）

其規條整齊嚴肅、而所見宏遠、猶得古人陶養人才之遺意。〔中國師儒之失教、有愧多矣、爲之慨歎。〕

其の規條は整齊嚴肅、しかも所見宏遠なり、猶ほ古人の人才を陶養するの遺意を得た

るがごとし。[中國の師儒の失教、愧有ること多し矣、之が爲に慨歎す。]

二十二日（1876年12月7日）

所以不可及、在罰當其罪、而法有所必行而已。

及ぶべからざる所以は、罰その罪に当たり、しかも法必ず行はるる所有るに在るのみ。

十一月初七日（12月22日）

西洋之開闢藩部、意在坐收其利、一切以智力經營、囊括席捲、而不必覆人之宗、以滅其國、故無專以兵力取者、此實前古未有之局也。

西洋の藩部を開闢するや、意、坐して其の利を收むるに在り、一切智力を以て經營し、囊括席捲す。而れども必ずしも人の宗を覆へし、以て其の國を滅さず。故に専ら兵力を以て取る者無し。此れ實に前古に未だ有らざるの局なり。

十一月十三日（12月28日）

英人謀國之利、上下一心、宜其沛然以興也。

英人は國の利を謀ること、上下心を一にす。其の沛然として以て興るも宜なり。

十一月十四日（12月29日）

亦見西洋列國敦信明義之近古也。

亦た西洋列國の信に敦く義に明らかなるの古に近きを見るなり。

十一月十八日（1877年1月2日）

南宋以後、邊患日深、而言邊事者、峭急褊迫、至無以自容。程子大儒、論本朝五不可及、一曰「至誠待夷狄」。北宋以前、規模廣博、猶可想見。孟子固曰「以大事小者、樂天者也。以小事大者、畏天者也」。而引湯事葛・文王事昆夷、以爲樂天。漢高祖一困平城而遣使和親、唐太宗至屈尊突厥。開國英主、不以爲諱。終唐之世、周旋回紇・吐蕃、隱忍含垢。王者保國安民、其道固應如此。以夷狄爲大忌、以和爲大辱、實自南宋始。然而宋明兩朝之季、其效亦可睹矣。

西洋立國二千年、政教修明、具有本末、與遼金崛起一時、倏盛倏衰、情形絕異。其至中國、惟務通商而已。而窟穴已深、逼處憑陵、智力兼勝、所以應付處理之方、豈能不一講求、並不得以和論。無故懸一「和」字以爲劫持朝廷之資、侈口張眼、以自快其議論、至有言寧可覆國亡家、以不可言和者、京師已屢聞此言。召公之戒成王曰「祈天永命」。祈天者、兢兢業業、克抑貶損、以保國安民爲心。誠不意、宋明諸儒議論流傳、爲害之烈、一至斯也

南宋以後、外患は日ましに深刻になったけれども、外敵に対する議論は、強硬一辺倒で、とても受け入れられないものとなってしまった。大儒程頤は宋朝の空前の長所を五つとりあげ、その一つに「夷狄に至誠をつくした」（『二程全書』「遺書」十五）という。北宋以前にはなお、見識は広がったことが想像できるだろう。孟子ももちろん、「大を以て小に事える者、天を楽しむ者なり。小を以て大に事える者は、天を畏れる者

なり」といい、あわせて、殷の湯王が無道な葛伯につかえ、周の文王が犬戎につかえた事例を引いて、これらを「天を楽しむ」ものだとしている（『孟子』梁惠王下）。漢の高祖は平城で匈奴に敗れると、使者を派遣して和親をはかった。唐の太宗は膝を屈して、突厥を尊ぶことさえした。王朝を建てた英主なら、タブーとはしなかったものである。唐の末年にも、ひそかに恥を忍んで回紇・吐蕃^{ウイグル チベット}と交際した。王者とは国を保ち民を安んずるもの、その道はもとよりこうでなくてはなるまい。夷狄を大なる禁忌とみなし、これと和睦するのを大なる恥辱と考えるのは、じつに南宋から始まった。しかしながら南宋・明朝の末路をみれば、その結果はやはり明らかではないか。

西洋は国を立てて二千年、政教は公明正大、「本」も「末」も兼ねそなわっている。 崛起したかと思えば、たちまち栄え、たちまち衰えた遼や金など、昔の夷狄のありようとはまったくちがうのである。西洋が中国にやって来るのは、通商が目的でしかないけれども、すでに堅固な拠点を有し、近くに迫って圧迫を加えており、智と力は兼ねて勝っているから、これに対処する方法は、まったく研究しないわけにはいかないし、和睦を講じられない、というわけにもいかない。それにもかかわらず、自らその議論を痛快にしようと、何の理由もないのに、「和」という一字をあげつらって朝廷を脅かし、大言壮語、そのあげく「朝廷を亡ぼしても、和睦を口にしてはならぬ」などと言う者が出てくる。北京で実際にしばしばこんな議論を耳にした。周の時代、召公は成王を戒めたとき、「天に永命を祈る」とおっしゃった（『尚書』召誥）。「天に祈る」とは、国を保ち民を安んじることが第一に考え、失敗をしないよう慎重にも慎重を期すことであろう。これほどまで、宋・明の儒者どもの議論が流布し、ひどい害をおよぼしているとは、思いもよらなかった。

十二月初六日（1877年1月19日）

西洋以智力相勝、垂二千年。^{ミスル} 麥西・^{メッカ} 羅馬・麥加、迭爲盛衰、而建國如故。近年英・法・俄・美・德諸大國、角立稱雄、創爲萬國公法、以信義相先、尤重邦交之誼、致情盡禮、質有其文、視春秋列國、殆遠勝之。……輕重緩急、無足深論。而西洋立國、自有本末、誠得其道、則相輔以致富彊、由此而保國千年可也。不得其道、其禍亦反是。班固匈奴傳贊有曰「來則以禮接之、畔則以兵威之、而常使曲在彼」。處爭奪猶然、而況其所挾持者尤大而其謀尤深者乎。劉雲生自謂能處洋務、至是亦自證其所知之淺、而曰「處今日之勢、惟有傾誠以與各國相接、舍是無能自立者。

西洋は二千年近くにわたり、智と力とをつくり、しのぎをけずってきた。エジプト・ローマ・イスラームが盛衰あいつぎながらも、滅ぶことなく、存続している。近年では、イギリス・フランス・ロシア・アメリカ・ドイツの列強が、並立して競い合いながらも、万国公法をつくって信義を優先し、何より国と国との友好関係を重んじている。 情誼を伝え礼儀をつくすのは、文質彬彬とそなわっていて、春秋の列国よりもは

るかに勝っているといえよう。……何が重要か緊急かは、深く立ち入っている暇はないけれども、しかし西洋の立国には、当然に「本」と「末」とがあつて、もしその事情をつかめれば、富強を実現する助けとなり、それを通じて、むこう千年は国を保つていけるだろう。つかめなければ、やはりこれとは逆の災禍がふりかかるだろう。『漢書』匈奴伝の末尾に作者の班固が、「夷狄が恭順に出て来れば礼遇し、背いたなら武力示威する。こうして必ず夷狄に非があるようにしむける」とコメントしている。むかし争いに対処するのでさえこうなのだから、今いっそう大きな脅威となり、さらに深い謀略をひめている西洋諸国に対しては、なおさらそうであろう。劉雲生〔劉錫鴻〕などはかねて、西洋諸国に対処できる、と自任していた人物であるが、ここに至って、かれも自分の見聞がいかに浅薄だったかをさとって、「今日の情勢に対処するには、誠意をつくして各国とつきあつていくほかない。これを捨てて独立を保つてはいけないだろう」といっている。

・『郭嵩燾日記』より

光緒三年十一月十八日（1877年12月22日）

略考英國政教原始：議院之設在宋初、距今八百餘年。至顯理第三而後有巴力門之稱、即今之上議院也。一千二百六十四年、令諸部各擇二人、海口擇四人、入巴力門會、爲今下議院所自始。買阿爾之設在一千八百八十年後設立倫敦買阿爾衙門、令民自選。……計英國之強、始自國朝、考求學問以爲富強之基、亦在明季、後於法蘭西・日耳曼諸國。創立機器、備物制用、實在乾隆以後。其初國政亦甚乖亂。推原其立國本末、所以持久而國勢益張者、則在巴力門議政院有維持國是之義、設買阿爾治民、有順從民願之情。二者相持、是以君與民交相維繫、迭盛迭衰、而立國千餘年、終以不敝、人才學問、相承以起、而皆有以自效、此其立國之本也。而巴力門君民爭政、互相殘殺、數百年久而後定、買阿爾獨相安無事、亦可知爲君者之欲易逞而難戢、而小民之情難拂而易安也。中國秦漢以來二千餘年、適得其反。能辨此者、鮮矣。

イギリスの政教を起源から論じよう。議会は中国の宋初、今から八百年あまり前に設立された。ヘンリー三世の時代になって以後に巴力門パーラメントという名称ができた。これがいまの上院である。1265年、各州から二人、都市から二人を選んで、巴力門パーラメントに加入させた。これが今の下院の起源である。買阿爾メイヤー（市長職）の設置は1180年以降であり、倫敦買阿爾衙門（ロンドン市庁舎）が建てられ、民みずからに選任させた。……イギリスが強くなったのは、わが清朝時代からだと思う。明末に学問を研究して富強の基礎をきずいたが、そのときはフランスやドイツ諸国に遅れをとっていた。機械を發明して「物を備え用を致す」（『易』繫辞上）ようになったのは、じつに乾隆以後であつて、当初は国政もきわめて乱れていたのである。イギリス立国の「本」と「末」を追究して

みると、それでも持ちこたえて勢力が盛んになっていったのは、^{パーラメント}巴力門が政治を議論して、^{メイヤー}国是の本義を保ち、^{メイヤー}買阿爾を設けて民を治め、民の願うところに従っているからだとわかる。この二者が譲らず行われたがために、君民たがい提携しあい、建国から千年あまり、盛衰はこもごもあっても、疲弊しきってしまうこともなく、人材・学問があいついで興って貢献できたのである。これがその立国の「本」にほかならない。しかし^{パーラメント}巴力門では、^{メイヤー}君民が政権を争って殺戮しあい、数百年をへてようやく安定した。平穩無事だったのは^{メイヤー}買阿爾だけなのであって、ここからも君たる者は欲をほしいままにしがち、小民は従順であることがわかる。[だから君よりも民を重んじなくてはならないのに、] 中国では秦漢以来、まるで正反対になっている。このあたりの機微に気づく者はほとんどいない。

光緒四年二月初二日（1878年3月5日）

近年波斯國主遊歴倫敦、君主亦贈以寶星。代謨斯新報頗譽之、曰「哈甫・色維来意斯里、何足以當寶星」。蓋西洋言政教修明之國曰色維来意斯得、歐洲諸國皆名之。其餘中國及土耳其及波斯、哈甫色維来意斯得。哈甫者、訳言得半、意謂一半有教化、一半無之。其阿非利加諸回國、曰巴爾比里安、猶中國夷狄之稱也、西洋謂之無教化。三代以前、獨中國有教化耳。故有要服・荒服之名、一皆遠之於中國而名曰夷狄。自漢以來、中國教化日益微滅、而政教風俗、歐洲各國乃獨擅其勝、其視中國、亦猶三代盛時之視夷狄也。中國士大夫知此義者、尚無其人、傷哉。

最近、ペルシア皇帝がロンドンにきて、イギリス国王も勲章を贈った。『タイムズ』^{ハーフ シヴィライズド}紙は、「^{ハーフ シヴィライズド}ハ甫・色維来意斯得 [half-civilized] だから、勲章に値しない」と譏っている。西洋では、政教の公明正大な国を^{シヴィライズド}色維来意斯得 [civilized] といい、ヨーロッパ諸国はみな、そう名のっている。ヨーロッパ以外の中国・トルコ・ペルシアは、^{ハーフ シヴィライズド}ハ甫・色維来意斯得である。^{ハーフ}ハ甫とは「半ばを得る」の訳であり、教化が半ばあり、半ばない、との意味になる。アフリカのムスリム諸国は、^{バーバリアン}巴爾比里安 [barbarian] という。中国で夷狄というのと同じように、これが西洋で、教化がない、との意である。三代（夏・殷・周）以前には、中国にしか教化はなかった。ゆえに〔王城からはるかに隔たった、天子の感化の及ばない地に〕要服、荒服という呼び方があり、中国から遠ざかれば、いっさいそれを夷狄と名づけておけばよかったのである。ところが漢以来、中国の教化は日ましに衰え、政教風俗はヨーロッパ各国のみが優越するようになり、あたかも三代の盛時に夷狄をみていたような目で、中国のことを見ているのである。中国の士大夫でこうした議論を知る者はいない。悲しいことではないか。

○郭嵩燾の観点

：「官民」の垂直的構造・「華夷」の空間的構造

＝世界（観）・秩序（観）の動揺とイギリス帝国
 ～中国の頹廢：「民」「夷」の軽視～「南宋」以来の末期的現象

II 劉錫鴻『英軺私記』

○内容と特徴

～イギリス滞在記・見聞記・英国便覧＝『使西紀程』とは異なる

- ①西洋事情の詳細な記述
- ②中国への導入不可という主張

○みどころ

①西洋事情

光緒三年正月十二日（1877年2月24日）

人無業而貧者、不令沿街乞丐、設養濟院居之、日給饗餐、驅以除道造橋諸役。故人知畏勞就逸、轉致自勞而自賤、莫奮發以事工商。國之致富、亦由於此。

人業無くして貧なる者、沿街に乞丐せしめず、養濟院を設けて之に居らしめ、日び饗餐を給し、驅るに道を除し橋を造るの諸役を以てす。故に人、勞を恐れ逸に就くは、轉じて自ら勞して自ら賤しきを致すを知り、奮發し以て工商を事とせざる莫し。國の富を致すも、亦た此に由る。

人無業而貧者、不令沿街行乞、收入養濟院而衣食之、日督作工、以勞其體。因人畏勞就逸、轉致自勞而自賤、故莫奮發以事工商。（張德彝『四述奇』光緒三年三月二十八日条）

：「國之致富、亦由於此」と評しているのは劉～「道」の重視（溝口）

②導入不可の主張：日本の前大蔵大輔井上馨との会談

光緒三年二月二十七日（1877年4月10日）

井上馨來、與正使並接晤之。井曰「中國寶藏實多、何爲貨棄諸地、胡不效西法改弦而更張之」。正使未及答、余曰「且君之綜司戶部、亦嘗革戶部之弊政否」。答曰「甚願與革、衆不我從」。余曰「此非衆之好爲疑沮也。祖宗制法、皆有深意、歷年既久、而不能無弊者、皆以私害法之人致之。爲大臣者、第能講求舊制之意、實力奉行、悉去其舊日之所無、盡還其舊日之所有、即此可以復治。若改弦而更張、則驚擾之甚、禍亂斯生、我中朝敢不以貴國爲戒乎。金銀煤鐵等礦、利在焉、害亦存焉。非聖天子所貪求也」。井唯唯。

井上馨が来訪し、正使の郭嵩燾といっしょに面会した。「中國には資源がじつに多いの

に、どうして捨て置いたままにしているのですか。西洋のやり方にならい、改革してはいかがですか」と井上がいうと、正使が答えないうちに、わたしが言った。

「あなたが戸部（大蔵省）をとりしきっておられたとき、戸部の弊政を改革なさいましたか」。

「改革したいと切望したのですが、だれもついてきませんでした」

「それは何も、みな好んで妨げたわけではありません。祖宗の制法にはいずれも深意があります。長い年月のうちには、どうしても弊害がおこってきますが、それはすべて私心で法をそこなおうとする人のせいです。大臣たる者、できるのは、もともとの制度の意図を研究して、全力で実行し、元来にはなかったものをいっさい排して、すべてをもとのとおりに還元するしかありませんが、それでただちに治世が回復します。改革をやれば人々を驚かせて混乱をまねき、内乱さえ生じかねません。我が中朝は貴国を戒めとせざるをえません。金・銀・石炭・鉄鉱などは確かに利がありますが、害もあるものです。聖天子があくまで求めるものではございません」。井上はうなづくばかりだった。

: ①と②の併存、①より②のほうが積極的→そうした論理構成の由来？

光緒三年二月二十八～三十日（1877年4月11日～13日）：「光學・電學・熱學・重學」

……此皆英人所謂實學、其於中國聖人之教、則以爲空談無用。中國士大夫惑溺其說者、往往附和之。余爲之辨曰「彼之實學、皆雜技之小者。其用可製一器、而量有所限者也。

……中國自秦漢以迄元明、修其教則治、淪其教則亂。其治也、遐荒向德、重洋慕化、仁義之風、遂漸及於四裔。其亂也、人多驚利而尚力、海內糾紛。然君臣父子兄弟夫婦朋友之倫、皜然猶存、非甚不肖。猶知顧畏仁義、不敢過肆其鶩驚。……

今西洋之俗、以濟貧拯難爲美舉、是即仁之一端、以仗義守信爲要圖、是即義之一端。

……非然者、一意講求雜技、使趨利之舟車・殺人之火器、爭多競巧、以爲富強、遽謂爲有用之實學哉。

……此其理非可驟語而明。究其禁雜技以防亂萌、揭仁義以立治本、道固定萬古而不可易。彼之以爲無用者、殆無用之大用也夫。

……これらはすべて英人のいわゆる實學であり、中国聖人の教を空談無用とみなす。中国の士大夫にもこの説に惑溺し、往々にして附和する者がいるので、説明したい。かの實學とはすべてつまらない雜技である。一器を製ることのできる効用はあっても、たかが知れたものだ。……中国は秦・漢から元・明にいたるまで、その教を修めれば治まり、その教を淪^すてれば乱れる。治まったときは、遠方から海を越え徳化を慕って来るので、仁義の風が四裔^{がいこく}にまで及んでゆく。乱れたときは、利をもとめ力をたつとぶ人が多くなって、天下が紛糾する。……

いま西洋では、貧窮を救うのを美挙だとする風習があつて、これは仁の一端にほかならない。また信義を守るのを重要だとする風習もあつて、これは義の一端にほかならない。……そうでない者がひたすら雑技を研究して、利益が目的の船車や殺人が目的の火器の数量と精巧さを競うようになり、これを富強だと思ひ込んでいるが、それがとりもおさず有用の實學であるといえようか。

……ともあれ聖人は、乱のおこるのを未然に防ぐために雑技を禁じ、治の根本を打ち立てるために仁義を掲げられ、これで道は堅固に定まって万古不易のものとなった。

外国で無用だと思われるものは、じつは無用の大用というべきものなのである。

:「實學」＝「雑技之小」＝「西學」≠「富強」

～西洋にも「仁義」あり＝「富強」～中国とは異なる

光緒三年四月十五日（1877年5月27日）：^{ベルシア}「波斯藩王」との会見

……曰「中國現與喀構兵、徒利俄人。覽天下大勢、俄英之強、皆未有艾。而貴國與敵國、乃以弱承之、將來必爲所併、第不知歸英抑歸俄耳」。余曰「是必不然。天道禍盈而福謙。如俄之貪噬無厭、安知不奪其魄、使之驟致喪敗、若拿破崙之滅亡、強弱勝敗、何常之有。大清威行四裔、殆二百年、自咸同間、蠱賊內訌、財力稍困。朝廷顧惜民命、不肯贖武於外洋、其勢遂似於弱。今掃海內、漸靖西陲、武功既成、一意政教、不及數年、網維大張、國威自可復振。貴國君臣、苟能發憤、事亦如之。何至遽被蠶食於彼暫強者乎」。王曰「中國孔聖之教、禁人言利、戒人尚力、知斂退而不知奮進、故易弱其國也」。余曰「是更不然。孔聖之戒言利、爲斂財害民者耳。其禁尚力、亦爲恃強肆惡者耳。足食足兵、治國何嘗不務富強。但所以致富強者、准繩乎仁義之中、故其教爲萬古所不能易。中國歷朝、強盛由此、我大清乾隆以前、遐荒效順、重洋慕化、亦由於此。今英國知仁義爲本、以臻富強、未始非由久入中國、得聞聖教所致、奈何以爲貽害也」。

……「中国がいまカシュガル（ヤクーブ・ベク政権）と交戦しているのは、ロシアを利するだけである。世界の大大勢をみるに、ロシアとイギリスの強さは底が知れない。衰勢にある貴国と我が国は、その圧力をうけており、近いうちにきっと併呑される。英露どちらに併呑されるかわからないだけなのである」。

「全くの誤りだ。「天道は盈を禍わざわいして謙に福さいはひす」（『易』謙）。貪欲あくなきロシアでも、魂までは奪えず、ナポレオンの滅亡のように、にわかには衰滅させられることを知るまい。強弱勝敗は常ないものである。大清は二百年もの間、その威は四裔にゆきわたったが、咸豊・同治年間より内乱がおこって、財力が次第に苦しくなった。朝廷は民の命を大事に思つて、対外的に武威を誇るようなマネは慎んだので、弱体化したようにみえたかもしれない。いま天下はきれいになり、西辺平定をおもむるにすめつつある。武功が成ったあかつきには、政教に専心して、数年のうちに綱紀は大いに

ひきしまり、国威も自ずからふたたび振るうようになろう。貴国の君臣も発憤すれば
そうになれるはずで、一時的に強盛な国に蚕食されるがままにはなるまい」。
「中国の孔子の教えは、利を言うのを禁じ、力をたつとぶのを戒めており、二の足をふ
んで退くばかり、勇敢に進むことを知らない。だから国が弱体化しやすいのだ」。
「いよいよ間違っている。孔子が利を言うのを戒めたのは、財を搾取して民を苦しめる
からであり、力をたつとぶのを禁じたのは、強さにたのんで悪逆のかぎりをつくすか
らである。食糧と軍隊を充足させるのだから、国を治めるには、富強につとめないわ
けはない。ただし富強をもたらすには、中庸をえた仁義をよりどころとするから、そ
の教が万古不易となるのである。中国の歴代王朝が強盛になったのも、このためであ
り、我が大清の乾隆以前、遠方から海を越え徳化を慕って来たのも、やはりこのため
である。いまイギリスが仁義を根本として富強を実現したのは、以前から中国に来て、
聖人の教えを聞き知ることができたからでもあるのだ。……」。

: 「孔聖の教」「治」「仁義」「富強」の関係

= 中国と西洋との関係～対外観念「乾隆以前」の位置

○まとめ

: 清末知識人の世界観の転換？

= 二人とも渡航以前の政見・世界観の堅持：中国の伝統的「政教」の位置づけ

: イギリス帝国への「まなざし」

= 物質的「洋務」に非ざる観点～「政教」への注視

= 「帝国」と近代国家～「中体西用」「附会論」

【参考文献】

The First Chinese Embassy to the West: the Journals of Kuo Sung-Tao, Liu Hsi-Hung and Chang Te-yi, translated and annotated by J. D. Frodsham, Oxford, 1974.

鍾叔河「“用夏變夷”の一次失敗」、同主編『走向世界叢書——劉錫鴻：英軺私記・張德彝：隨使英俄記』嶽麓書社、1986年。

溝口雄三「ある反「洋務」——劉錫鴻の場合」、同『方法としての中国』東京大学出版会、1989年。

佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会、2000年。

張宇權『思想與時代的落差——晚清外交官劉錫鴻研究』天津古籍出版社、2004年。

小野泰教「郭嵩燾・劉錫鴻の士大夫観とイギリス政治像」『中国哲学研究』第22号、2007年。

拙編『中国近代外交史の基礎的研究——19世紀後半期における出使日記の精査を中心として』平成17～19年度科学研究費研究成果報告書、2008年。

拙訳「使西紀程、郭嵩燾日記（抄）」「西洋に倣った鉄道の導入に反対する上奏」『新編原典中国

13. 帝国へのまなざし

近代思想史 第2巻 万国公法の時代——洋務・変法運動』村田雄二郎責任編集、岩波書店、2010年、25～32、87～104頁。